



白寿遺跡弥生臺棺

グラビア説明

白 寿 の 壺 棺

河 口 貞 徳

白寿遺跡は吹上町中ノ里白寿にあり、伊作川下流の沖積低地にのぞむ標高20m余の舌状に突出したシラス台地に立地する。前面を北流する梨子川をへだてて西方200mに、入来遺跡の立地する舌状台地に相対している。この遺跡は土砂の採掘のため縄文後期の市来式土器が露呈し、吹上高校生徒等によって発見された。その後土砂の採掘工事に伴って県文化課の発掘調査が行なわれ、小見用壺棺（中期末）などが発見された。報告書は未だ出ていないが、発掘された壺棺は県立博物館の考古資料館に陳列されている。

昭和50年12月には辻正徳氏等によって試掘が行なわれ、縄文後期の台付皿形土器などが発見され、台付皿形土器については、鹿児島考古11号に河口が紹介した。

壺棺土器は耕作中に発見されたもので、昭和53年11月19日に、地主加治屋昇氏より連絡を受け、本田道輝と共に調査を行なった。

遺 構

不正円形の土壌が、基盤のシラス層まで掘り込まれ、床面は東へ向かって傾斜している。床面には、やや西の方にかたよって壺形土器が、口縁部を東にかたむける形で置かれていた。蓋に使用された鉢形土器は、壺形土器の内部に落ちこんで、底部を上にした状態で発見された。壺形土器は底部より18cm～13cmの位置に、縦3.5cm横4.5cmの孔が穿がたれており、蓋に使用された鉢形土器は、煮沸に使用したものを再使用したものである。壺形土器の内部からは遺体は発見できず、副葬品も見られなかったが、人骨は腐食して消失したものと思われる。

壺 形 土 器

高さ47.5cm、口径27cm、胴径47.3cm、底径9cm。著しく肩の張った器形で、頸部と胸部の境界に、細い刻目凸帯を一条めぐらし、筒状に立ちあがった太めの頸部から口唇部へ外反し、口唇部には沈線有し、その上下に細い刻目を施す。底部は小さく上げ底気味である。色調は紅褐色で焼成は良く、器面は研磨され、頸部には縦位の磨きか加えられている。破片としては高橋貝塚・入来遺跡などで発見されていたが、完形土器としての発見ははじめてである。一型式をなすものと考えられる。前期末であろう。

鉢 形 土 器

口径30.5cm、高さ19cm、底径7cm。口縁部は粘土帯を貼付して、断面三角形の張り出しを形成している。壺形土器とセット関係をなすもので、前期末と考えられる。